

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 30 日現在

機関番号：16201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23792596

研究課題名(和文) 苦痛症状のあるがん患者に対する緩和ケア評価におけるコンフォート指標の開発

研究課題名(英文) Comfort index in the palliative care evaluation to a cancer patient with pain

研究代表者

金正 貴美 (Kinsho, Takami)

香川大学・医学部・講師

研究者番号：00335861

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：(はじめに)本研究は、苦痛症状のあるがん患者に対する緩和ケア評価におけるComfort指標を抽出することを目的としている。(用語の定義)Comfort：苦痛が軽減される感じや状態である。(研究方法)データ収集方法は、対象者に疼痛についてのインタビューや参加観察した内容をじっくりと読んだ上で、疼痛の軽減について語っている箇所を抜き出し、類似性と相違性を考えながら分類し、ネーミングする質的記述法を用いた。(結果)苦痛症状のあるがん患者のComfortは、「痛みは減ってきている」「痛みはわずかである」「痛みが和らいでいる」「痛みが違ってくる」であった。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to explore Comfort index in the palliative care evaluation to a cancer patient with pain. Data were collected using semi-structured interviews with 11 cancer patients with pain. And were analyzed using method of content analysis. Four categories were extracted from Comfort index in Cancer patients with pain. These categories included "The pain is decreasing.", "The pain is small.", "The pain has softened.", "The pain has become different."

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学 臨床看護学

キーワード：苦痛 がん患者 Comfort 緩和ケア

1. 研究開始当初の背景

苦痛症状のあるがん患者にとって、身体症状が緩和され安楽を得ることは重要な課題である。がん患者の生活適応を評価する尺度としてQOL - ACDや、症状の自己評価が困難な患者にも使用できる代理評価尺度STAS-Jが開発された。しかしこれらの尺度はQOLや痛みの軽減のみを主目的に作成されている。患者の痛みは全人的なものであり、その痛みが緩和されると患者は苦痛の軽減だけではなく心の安らぎや満足感を得る。Comfort (安楽) は、看護においてケアの核ともなり必須条件とされている (日本看護科学学会学術用語検討委員会, 1995)。Comfortは介入により受け手が経験する状態であり、主観的な感覚でもある。がん患者の苦痛は身体的・心理的・社会的・スピリチュアルな側面があるため全人的苦痛と言われている。全人的苦痛が緩和されるには、身体的な痛みのみならず他の側面の痛みにも働きかけることが重要である。看護師は患者の状況やニードに応じてケアリング、体位保持、タッチ、マッサージなどの緩和ケアを行い、がん患者は痛みの軽減や安心を得ている。このような患者のコンフォートを緩和ケアのアウトカム評価とするために、本研究ではコンフォート指標を開発することを目的としている。

2. 研究の目的

本研究は、進行がん患者の苦痛症状に対する緩和ケア評価におけるコンフォートの指標を抽出することを目的としている。

3. 研究の方法

〔平成23年度〕

国内外の医療を含め多領域におけるComfortの文献および書籍、例文を収集し、Comfortの文献レビューを行った。

(1) 医療系文献より

Holistic Comfortの概念を用いて行われた現在までの研究170件において、Comfortは患者の状態やプロセスであるが、臨床での意味において看護ケアのoutcomeや看護の機能Comfort Careとしても用いられている。さらにComfortは人間の基本的ニードとしても用いられる。Comfortの使用は属性と意味において多様で矛盾している。そのためComfortを探求する研究や臨床での使用において混乱がみられる。またComfortは名詞であり、動詞でもある。Comfortの属性は 苦痛の軽減 (freedom from pain or constraint) 心地よさ (comforts) things that contribute to physical ease) 満足 (satisfaction of bodily needs) Well-being (well-being / prosperity and the pleasant lifestyle secured by it) 喜び (Pleasure, enjoyment, delight, gladness) 安らか 関係での休らい 家族とのつながり 生活が保たれる 自尊心 安全であった。

(2) 人文科学、法学、経済学、理学、工学、

農学の文献より

CiNii Articlesが所有しているComfortの概念を用いた論文(1998年~2011年)は1597件であった。そのうちComfortの概念について定義している論文40件において、Comfortは 快適性 心地よさ 慰め 暮らしやすさ 居心地の良さといった日本語訳の概念で使用されていた。

(3) Comfortの例文(辞書や書籍)より

Comfortの例文を、辞書や書籍より760件収集した。そのうちComfortが和訳されている用語、あるいは文章の意味より適切だと考えられる和訳を行った。Comfortは、快適性 慰め等であった。

3. 研究の方法

〔平成24、25年度〕

臨床でデータ収集を行う。患者の安楽の捉えについてインタビューおよび参加観察を行い、分析する。

(1) 調査協力者

特定機能病院に入院されており、進行がんで疼痛緩和のためオピオイドを使用している、もしくは緩和ケアチームに紹介され疼痛緩和を図っている患者である。

(2) データ収集方法

対象者に疼痛についてのインタビューや、リハビリ時において参加観察を行った。

(3) データ分析方法

インタビューや参加観察した内容を逐語録にし、じっくりと読んだうえで、疼痛の軽減について語っている箇所を抜き出し、類似性と相違性を考えながら分類し、ネーミングする質的記述法を用いた。

(4) 調査期間

平成23年4月から平成26年3月である。

(5) 倫理的配慮

調査協力者に対して、文書と口頭で説明し、文書での同意を得て実施した。参加観察は日常生活・医療・緩和リハビリテーション内容に支障がないよう配慮した。研究協力者や周囲のほかの患者も含めて緊急事態が発生したときは、すぐに観察を中断して患者の安全を優先することとした。また研究者所属の倫理審査委員会の承認を得て行った。

4. 研究成果

〔平成24、25年度〕

(1) 対象者の概要

特定機能病院に入院されており、進行がんで疼痛緩和のためオピオイドを使用している、もしくは緩和ケアチームに紹介され疼痛緩和を図っている患者11名であった。対象者の概要について表1に示す。男性7名で女性4名であった。年齢は60歳代が最も多く、病名は、肺がんや子宮がんが多かった。

性別	男性	7 (63.6)
	女性	4 (36.3)
年齢	50歳台	1 (9.0)
	60歳台	7 (63.6)
	70歳台	3 (27.2)
病名	胃癌	1 (9.0)
	肺癌	3 (27.2)
	前立腺癌	1 (9.0)
	子宮頸がん	3 (27.2)
	咽喉頭部癌	2 (18.1)
	腹膜原発癌	1 (9.0)

(2) 苦痛症状の程度や生活への影響

緩和ケア用 QOL 調査票ケアノートを用いた。評価は、質問項目ごとの得点、Physical well-being(P1 ~ P10)、Mental well-being(M1 ~ M6)と Life well-being(L1 ~ L8)の 3 つの尺度ごとに「項目得点の加算 ÷ その尺度の回答項目数」を算出、および下位尺度ごとの同様な算出：Appetite Loss(P3、4、7)、Constipation(P6、8)、Fatigue(P9、10)、Daily functioning(L1、2)、Social functioning(L3、4)、Subjective QOL(L5 ~ 8)によって行われている。

進行がんで疼痛緩和のためオピオイドを使用している 11 名の患者に、この緩和ケア用 QOL 調査票ケアノートを用いて調査を行った。結果について表 2 に示す。

項目	平均値	標準偏差
Physical well-being	2.2	1.4
Mental well-being	2.3	0.9
Life well-being	5.5	1.3
Appetite Loss	2.0	2.1
Constipation	2.5	2.3
Fatigue	2.7	2.5
Daily functioning	4.0	1.8
Social functioning	7.6	2.7
Subject QOL	5.2	1.8

(3) 苦痛症状に対するコンフォートの表出

進行がんで疼痛緩和のためオピオイドを使用している患者の表出は、【痛みは減ってきている】【痛みはわずかになっている】【痛みが和らいでいる】【痛みが違ってくる】の 4 つのカテゴリーが明らかになった。それぞれのカテゴリーごとに、構成するサブカテゴリーや根拠となる発言について記述する。

【痛みは減ってきている】

このカテゴリーでは、『痛みは減ってきている』『薬が効いているとわかる』『以前と比べると、痛まない』『体全体の痛みはとれてきている』『強くなる痛みも緩和されている』のサブカテゴリーで構成されている。『痛みは減ってきている』では、「寝ていて、じっ

としている。そしたら痛みが減ってくる」や「これを 2 錠飲み始めて、そしたら痛みはだいぶ軽減されてきた」といった発言があった。『薬が効いているとわかる』では、「ロキソニンが効いているかどうかは、私には分からない。オキノームになったらわかる。」や「薬の量が変わっただけで、全然効きが違う。1 錠飲んだ場合と 2 錠飲んだ場合は、もう全然違う」といったように薬の量によって効きが全く異なることを表現していた。『以前と比べると、痛まない』では、「さっきみたいに強烈に痛いなという時があるけれど、薬を飲んだら、今はそんなに痛くない。少し圧迫されているなというくらいだ」という発言があった。『体全体の痛みはとれてきている』では、「オキシコンチンを 10 時に飲む予定だったのを 8 時にして増やした。これもここで飲まなくてもという時があるけれど、飲んでいただく方が全体としてはいい。体全体に痛みはとれている」と、定刻に飲む方が、飲まないよりも体全体に痛みがとれることを発言していた。『強くなる痛みも緩和されている』では、「以前であれば、だんだん痛くなったり、押された感じが出てきていたが、そういう症状はだいぶ緩和されている」と話していた。

【痛みはわずかになっている】

このカテゴリーでは、『わずかに痛い』『体の動きが軽い』『痛くてたまらないことはない』『動かしても痛くない』のサブカテゴリーで構成されている。『わずかに痛い』では、「ベッドで上を向いて寝ていると痛くなって、坐ったら痛みが和らいでまた普通のわずかに痛むくらいになることがある」といった、体位を変えることで痛みがやわらぎ、普段のわずかな痛さになることを表現していた。『体の動きが軽い』では、緩和リハビリのため、理学療法室に訪れた際に、自転車エルゴメーターを前にして「自転車こぎは軽いからな」という発言がみられた。『痛くてたまらないことはない』では、「今まで痛み止めは、あまり飲んで体には良くないと思って、できるだけ辛抱してきた。医師は、もう辛抱する必要がないから飲めという。最近は辛抱せずに飲んでいいる。」と話し、辛抱せずに内服していることで、痛くてたまらないという状況はなくなっていることを話していた。『動かしても痛くない』では、「あれからずっと坐っているけれど、痛くならない」や「こうしてもこうしても（動作を研究者に見せてくれる）、痛くならない。」と以前は痛くなっていたが、体を動かしても痛みが出現しないと話をしていた。

【痛みが和らいでいる】

このカテゴリーでは、『痛くないところに、体を置くと治る』『（動かずにいると）痛みが止まる』『痛くない姿勢で安静にしていると、痛みが和らいでくる』のサブカテゴリーで構成されている。『痛くないところに、体を置くと治る』では、「体重をかけると痛くなる。

また体重をかけなくても、寝ると痛くなる。しかし、痛くないところへ体を持って行くと治る」と痛みが増強せずに治る方向への体位について理解していた。『(動かずにいると)痛みが止まる』では、「いま間違いなく痛くないというのではない。ちょっとしたことで痛くなったり、痛みが止まったりする。足だっただけでこうしているようにしていると、全く痛くない。」と体位によって痛みが止まることを話していた。『痛くない姿勢で安静にしていると、痛みが和らいでくる』では、「坐ってわずかに痛い時に、寝るとさらに痛くなることがある。この胸と、背中後ろが痛い。そしてまた坐ると痛みが和らいでくる」と、坐ると痛みが和らぐことをつかんで実施していた。

【痛みが違ってくる】

このカテゴリでは、『痛みの違いを感じる』『痛みとは別の気持ちよい感覚がある』『体にちょうどいい温かさがある』のサブカテゴリで構成されている。

『痛みの違いを感じる』では、「深呼吸は、たびたびしている。そうしたら痛みが全然違う。(目の前で実際に研究者に深呼吸をして見せる)。深呼吸が痛みにどのように関係あるのかどうかは分からない。でも深呼吸をしていたら痛みが違うように感じる」と深呼吸の効果について話していた。『痛みとは別の気持ちよい感覚がある』では、「いろいろ試してみた結果、これがいい。(と転移部の骨関節の下に、薄めのビーズクッションをはさんでいるのを見せる)」と、体への気持ちよい感覚に注意を向けることで、痛みがそれることを話していた。『体にちょうどいい温かさがある』では、「ホットパックが最初大きかった。小さいものに替えて、背中に当てるとかえって痛みが増した。小さいホットパックを次に腰に当てると、ちょうど良い温かさになった」と話し、1日に2回ホットパックを取り替えることで、ちょうどよい温かさが維持できることをつかんでいた。

5. 主な発表論文等

今後順次発表していく予定である。

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

金正 貴美 (KINSHO Takami)

香川大学医学部看護学科講師

研究者番号：

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

本多 美枝 (HONDA Mie)

香川大学医学部附属病院 がん性疼痛看護

認定看護師

研究者番号 なし